

機窓から

渡辺 誠二

一九八〇年代、妻帯同で香港の子会社に営業担当職で赴任した私は、香港をベースにアジア諸国へ頻繁に出張した。当時の香港カイタック啓徳空港は、世界で最も着陸が難しい空港のひとつであった。

香港に戻る時、私はいつも飛行機の座席は右の窓側をリクエストした。飛行機は啓徳空港に着陸する前、私が住んでいる美浮地区メイフのビル群の上をすれすれに通過するので、機窓から私のアパートのベランダが見え、干してある洗濯物も見えた。

五年の赴任期間の満期となり、私たち夫婦の帰国が決定した。十二月、最後の出張へ向かう日の朝、「今度が最後だから、ベランダで手を振るからね」と妻は微笑んだ。

香港への戻りは、クリスマスが近い金曜日であったため、飛行機は満席状態。右窓席は取れなかったが、隣りの席を確保できた。窓席には大きな体の女性。挨拶を交わした。ビジネスで世界中の国々を巡っているオランダ人女性のクラウスさんだった。

離陸前、クラウスさんが世界中の料理についてあれやこれやを語り、世界一おいしいのは香港で食べる中華料理なのだと断定し、その根拠について、止めどなくしゃべり続けたため、私は席替えのお願いをするタイミングが掴めなかった。

席替えをなかなか言い出せず躊躇する理由がもうひとつあった。そもそも妻は、ベランダに出て手を振ると言ったことを覚えていいのか？覚えていても本当に実行するのか？との疑念が私の頭の中で小さく渦を巻いていたのだ。

まもなく離陸とのアナウンスがあり、クラウスさんは私に笑顔を向け、「これって、私にはしんどいのよね」と口をへの字にして言いながら、大きなお腹にシートベルトを回し締めようとした。今しかないと思った私は事情を説明し、席替えを頼んだ。「勿論OKよ」と私に窓席を譲りながら、おしゃべり好きのクラウスさんは、周辺の人たちに私の話を伝えた。一斉に「ほおー」という声が上がった。

飛行中、クラウスさんはワインとつまみをなんどもお代わりするたびに、勝手に私の分も乗務員にお願いをし、食べながら飲みながら、私に仕事のこと、自身の家族のこと、日本に対する賛美などを唇にバターを塗ったようにしゃべり続けた。聞き役の私はワインに少し

酔った。

飛行機が下降を始めた。

眼下に見える島々がだんだんと小さくなり、大小の船が機窓に次々に現れ、後方へ流れていく。飛行機は海上を抜け、陸地に入り、林立するビル群が見えてきた。ビルの窓ガラスに黄金色の夕陽が反射している。

ギョルギョルルとフラップが下がる音が聞こえ、美浮街が近づいてきた。

ガクンと車輪が出る衝撃音が尻に響いた。

機窓から、小さく揺れているひとつの朱色の点が見えた。

「あっ、あれだ」と私が小さく叫ぶと、クラウスさんも周りの人たちも、「おおっ」と声を漏らした。クラウスさんが体を私に押し付け、顔を私の顔にくっつけるようにして、私と一緒に機窓から覗いた。

朱色のセーターを着た妻は、両手を大きく広げて左右に振っていた。

機体がぐんと右に大きく傾き、妻の姿がズームアップされ、両腕をいっぱい振っている妻がはっきりと見えた。

クラウスさんが私の肩を叩きながら、喜びの声を上げた。機内に拍手が響いた。

機体が水平になり、妻の姿が見えなくなつて、飛行機は滑走路に入った。